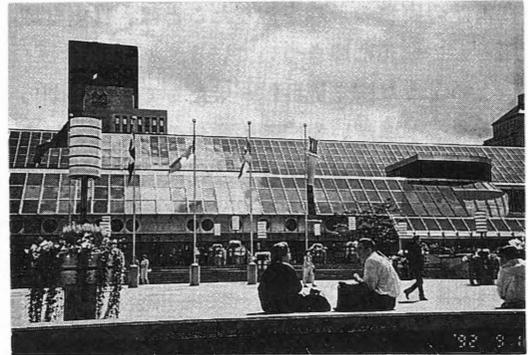


第12回 I C A 大会

小川 千代子

1992年は4年に一度、オリンピックと共に I C A大会が開催される年だった。88年、日本に公文書館法が成立・施行されてまもなくの I C A大会から早くも4年の歳月が過ぎたということでもあった。第12回 I C A大会は、カナダが招請し、モントリオールで開かれた。80年のロンドン大会では、日本からの参加者は僅かに3名、84年ボン大会では、6名、88年パリ大会10名、そして、今度のモントリオール大会では、遂に全史料協は I C A大会参加ツアーを企画し、そのツアー参加者だけで14名、大会参加者は、20名を越えたのである。日本の記録保存関係者が、国際的な連携にそれだけ関心を持つようになったと評価して良いだろう。もちろん、増えたのは日本からの参加者だけではない。大会参加者数がボン大会で1500名、パリ大会2000名、そして、モントリオールでは事前登録参加者だけで2300名以上、最終的には2500名とも3000名とも言われた。記録保存は今や世界の関心事となってきたようだ。

今大会では「情報化時代の専門家・アーキビストを考える」がテーマに掲げられた。会期中連日開催された全体会では、様々な角度からの発表があった。しかし、特に我々日本人にとって気になったのは、開会式や総会の挨拶の中で、「情報化」＝「日本の情報技術」と言う図式化



I C A大会会場となったモントリオール国際会議場された表現が幾つも聞かれたことである。ある人は、それを日本の戦争責任やら経済力に見合った貢献、つまり I C Aにもっと払えと言うことだと解釈したし、別の人は、日本の情報技術に対する敬意の表現だと解釈してくれた。本当のところは良く分からないが、「ヨーロッパ、北米、そして日本の…」という表現が、一度ならず聞かれたこと、この点に私達日本のアーキビストは注意を払わねばなるまい。今後の国際交流の方向性としては、単に経済＝高額の負担金のみならず、人的貢献についても応分の負担が望まれているのではないだろうか。

実際、今大会の閉会式には安藤正人氏が、全参加者を代表して謝辞を述べる役割を担ったし、教育養成部門の委員にも指名された。他にも文書館防災委員会（小川雄二郎）、I C A役員指名委員会（水口政次）、I C A円卓会議役員（小川千代子）など、I C A役員名簿に全史料協のメンバーが名を連ねることになった。まさに、人的貢献の始まりである。

会期中に2回開催された I C Aの議決機関である I C A総会には、高野修氏が全史料協の代表として参加した。ここでは、過去4年間の I C Aの様々な活動報告と共に、I C Aの規約のほぼ全面的な改訂と、会費の算定基準及び算定方法の改正、要するに値上げの審議が行われ、可決成立した。

もう一つ、日本に関わり深い話題があった。



9月7日夕刻 東アジア地域支部準備会
左手前から、ケスケメティ氏、馮子直氏、小玉正任氏、サントス氏（マカオ）、小川

第12回国際公文書館大会出席国及び人数

アルジェリア	9	フィンランド	44	国際組織	17
ドイツ	52	フランス	218	ウガンダ	1
サモア	1	ガボン	2	パキスタン	3
アンゴラ	1	ガーナ	3	パナマ	1
アンティグア	1	ギリシャ	6	パラグアイ	1
アルゼンチン	4	グリーンランド	1	オランダ	29
アルバニア	1	ギニア	2	ペルー	1
オーストラリア	16	ギニア・ビサウ	1	ポーランド	3
オーストリア	5	ハイチ	7	ポルトガル	19
バハマ	2	ホンコン	1	韓国	1
バルバドス	1	ハンガリー	2	ルーマニア	2
ベルギー	21	インド	2	イギリス	39
ベリーズ	1	インドネシア	17	ロシア	4
ベラルーシ	1	イラン	6	ルワンダ	1
ベニン	2	アイルランド	4	サントメ	1
バミューダ	1	アイスランド	1	サウジアラビア	5
ボツワナ	1	イスラエル	16	セネガル	10
ブラジル	27	イタリア	67	セイシェル	2
ブルガリア	5	ジャマイカ	2	シエラレオネ	2
ブルキナファソ	2	日本	19	シンガポール	2
ブルンジ	1	ケニア	4	スロバキア	7
カメルーン	1	クウェート	1	スーダン	1
カナダ	1,115	ラトビア	1	南アフリカ	2
カーボベルデ	1	リベリア	1	スリランカ	3
ケイマン諸島	1	リトアニア	3	スウェーデン	86
チリ	1	ルクセンブルグ	1	スイス	7
中国	22	マカオ	1	スワジランド	1
キプロス	2	マレーシア	3	タンザニア	2
コロンビア	3	マラウイ	1	チェコ	5
コモロ	1	マリ	1	トーゴ	1
コンゴ	2	モロッコ	1	トリニダードトバゴ	1
コスタリカ	3	マーシャル諸島	1	チュニジア	16
コートジボアール	10	モーリシャス	1	トルコ	1
クロアチア	2	メキシコ	53	ウクライナ	1
キューバ	3	モザンビーク	2	アラブ連合	2
デンマーク	24	ナミビア	1	アメリカ	118
ジブチ	1	ネパール	1	バチカン	4
ドミニカ	1	オランダ領アンティル	1	ベトナム	1
エクアドル	2	ニュージーランド	1	イエメン	5
スペイン	73	ニジェール	2	ザイール	2
エストニア	2	ナイジェリア	5	ザンビア	4
ミクロネシア	1	ノルウェー	33	ジンバブエ	1

(データは国立公文書館提供)

それは、ICA東アジア地域支部の結成に向けて具体的な動きが始まったことである。大会直前の執行委員会で中国の馮子直国家档案局長がこれを提案し、大会の総会でも承認された。更に、大会期間中には、ICA加盟の東アジア7カ国、すなわち、中国、日本、韓国、マカオ、香港、朝鮮民主主義人民共和国、モンゴルの内、大会に参加していた中国、日本、韓国、マカオの4カ国で今後の段取りに付いて話し合いの機会を持った。そこでの合意のあらまは、93、94の両年は、小委員会のような形で支部結成の準備を進め、95年にはやや拡大した規模で結成準備会を開催する。そして96年の北京大会で正式に支部を発足させようというものである。当面、この計画推進の中心的役割は、提案者でもある中国国家档案局が担当することになった。なお、この打ち合わせに同席したICA事務総長、ケスケメティ博士は、特に留意すべき点を次のように指摘した。

「すでにある各地域支部との十分な連絡を取り合うこと、それに、この東アジア地域の特有の状況を考慮し、各国のICAメンバーは、その所属するカテゴリー(注)にかかわらず、同等の立場でこの地域支部に参加していくことが望ましい。」

この発言は、日本のカテゴリーB会員である全史料協や、C会員の各個別文書館を意識したものと考えられる。今後の全史料協の国際交流は、ICA東アジア地域支部の活動と密接な関連性を帯びてくるかもしれない。

大会は9月11日夕刻、安藤正人氏の謝辞と4年後のICA大会を開催する中国の国家档案局長馮子直氏の北京への招待スピーチで締め括られ、ICAのアジア地域メンバーの存在感を強く印象づけたのであった。(国際資料研究所)

(注) ICAのメンバーには、A・B・C・D・Eの5種類のカテゴリーがある。Aは国の中央公文書館、Bは国を代表する専門家団体、Cは個別の公立文書館、D個人会員、E名誉会員。A～Dはそれぞれのカテゴリーに応じて、会費が必要。カテゴリーAの会費はGNP(国民総生産)およびGNP-PC(国民一人当たり総生産)に基づく計算式が用いられるため、日本はICAでも屈指の高額負担国となっている。Bは会員数300以上が\$200、会員数300未満\$100、Cは一律\$90、Dは所属機関がICAメンバーの場合\$60、それ以外は\$90である。Eの名誉会員は会費免除。